

•
ここではみんなが
死んでゆくとしか思えないのだ

R・M・リルケ

くそつたれの人類ども
ほらまたまた気分がすっきりする

C・ブコウスキー

二〇三〇年、五月二十日、正午。

郷田狂介と竹田金之助は、江ノ島の釣具屋玄治の前にいる。

入るのを躊躇っているのは、ふたりにとって憧れの存在である麻暮正作に会うのが、何となくオソロシイからである。

その様子を観ていた釣具屋の主人玄治が気を使って、ふたりを促し二階に案内してくれた。

窓もないが秘密の部屋だから勘弁してほしい、と玄治は云いながら襖戸を開けた。郷田も金之助も一瞬息を呑んだ。

その部屋には、稲村ヶ崎のあのおかみさんが見たという、ダースベイダーに似た鉄仮面がたしかに居たからである。

「初めまして、ボク、麻暮正作です」

金助が云った通り、人工声帯の声らしかった。

軀はロボットなのかクローンなのか、それとも生身なのか、よく解らなかったが、それを質せるのは金助だけだと郷田は思った。

郷田も金之助も畏まって自己紹介をした。

擦り切れた畳の上に腰を降ろすと、麻暮は、

「前置き抜きで話し始めますよ」

と云った。

当然という風に郷田と金之助は頷いた。

「未来計画カンパニーの地階から、海底に伸びた巨大なコードがあります。」

それがどういうものなのか探るために、ボクはしばし海底での生活を余儀なくされた。

ひとくちで云うとその巨大なコードは、長大な海底通路であり、その通路の内部には配線が施されています。

その通路の到達点まではとても行けないが、おそらく大平洋のど真ん中。

そこには、荒野いわく巨大な塊があります。

推察するにそれは、原爆とか水爆とかのレベルをはるかに超えた、宇宙的なレベルのもの。

荒野の部下の川上と木下がらみの機密情報を手に入れたが、荒野がそいつを稼働させる予定は七月七日。

七夕に何かを掛けたいんだらうと、あれこれ考えてみたがこんなことしか思い付かなかった。

七夕と云えば、牽牛星と織女星が相会する日だね。

もしも巨大な塊が牽牛星で、日本の国土が織女星なら、どういうことになるかだね」

ここで麻暮は一息入れた。

その一息は長く深く暗かった。

郷田にはこの一瞬の沈黙が耐えられなかった。

郷田は顔を紅潮させて、

「やっぱり、荒野の言葉は青天の霹靂のことではなく、あくまでも荒野の恐ろしい計画なのね。

そうしてあたしたちは、その計画を止めるメンバーなのね」

「いや、止めることは即ち、荒野の息の根を止めることに等しい。

それは畢竟、こちらの息の根も止まるというに等しい。

だから、止めるという時が来たら、ボクがひとりでやりますよ。

ケッケ。

ただその前に、計画を完全に把握しておく必要があります。

またその段階で、計画が最初からなかった状態、というものにしてしまうことができらばと。

そのために、おふたりの探索能力がほしいのです。

できれば未来計画カンパニーの地階に忍び込んで、できれば巨大コードに潜り込むこと。

ボクが調べたところによると、建物内から潜入するには地階のセキュリティーが凄すぎて駄目だから、海底の方から潜入できないかと。

鰐を備え付けたボクには不要だが、あなたがたにはこれが必要でしょう」

説明しながら、麻暮が押し入れから出してきたのは、スキューバ・ダイビングの用品一式二セットである。

「他に必要なものがあれば、用意するのは容易ですがね」

麻暮が尋ねると、すかさず金之助が、

「自分には七つ道具がありますから」

と云った。

郷田も負けずに、

「あたしには蛮勇がありますから」

と云った。

「頼もしい、頼もしい。

十年前は、山風健太さんと金ちゃんがいたけど、あのときよりも協力者が強力かもしれないね。

ケッケ、ケッケ。

ボクは駄洒落ばかりが上手くなって、果たして上手く行くか心配だったけど」

「とてもとても、健太さんや金助さんには叶わないわ」

郷田は応えたけれども、過信と空元気だけはあった。

金之助も父親以上の働きをするつもりでいた。

郷田が麻暮に潜入の注意事項を聞くと、麻暮はすかさず、

「それは一つだけ。

秘龍窟や洋館のときとはちがって、今回は相手が多すぎます。

よって、必ず同伴を避けることです。

一人がやられてもあと二人いる、二人やられても最後の一人がいる」

五月二十日、午後三時。

未来計画カンパニー地下一階の大講堂に、ロボットたちが勢揃いしている。

総数一千体。

壇上には、科学者の川上宙門と医学者の木下太郎。

マイクを前にロボットたちに、あれこれ注意事項を説明している。

そのひとつひとつに、ロボットたちが右手をあげ声をあげて応える。

まるでヒットラーに忠誠を誓う軍人たちだ。

だが、川上も木下もヒットラーではない。

ヒットラーは奥からおもむろに登場した。

ブルーのジャージの上下の上に黄金仮面が乗っかっている。

ロボットたちが右手をあげ歓声をあげる。

川上と木下の合図で歓声が鎮まり、荒野大三郎がマイクの前に立つ。

「私ハ、完全ニ、人間デアッテ時代、常ニ孤独デ、常ニ死ノ恐怖ニサイナマレテイマシタ。

恥ヲワスレテ、告白シナケレバナリマセンガ、無気味ナ死ノ恐怖ノセイデ、夜半メザメタ事ハ、百度ヤニ百度デハアリマセン。

スクナクトモ、オキテタッテイレバ、ソレハ生者ノ証拠デアリ、死者ハタツコトハデキナイカラト、私ハ真面目ニ、ソナハカナイ弁解ヲ、ズットカンガエテオリ

マシタ。

私たち人間ニトッテ、死ノ恐怖ハツヨスギル。

ソレハ、私ダケノ思考カトカンガエテイマシタガ、ソウデハナカッタノデス。

ソレデモ、ソノ死ノ恐怖コソガ、実ハ私たちノ最後ノ強大ナカダッタノデス」

ここで荒野は、苦し気に悲し気に淋し気に、ひとつ大きな深呼吸をした。

ロボットたちも全員釣られて、する必要のない呼吸をした。

荒野は微妙な笑みをたたえて、また口を開いた。

「人間カラ人類カラ、死ノ恐怖ヲトリノゾク、ソノタメニ何ヲナスベキカ。

私ハ沢山ノ試行錯誤ヲシナガラ、ヨウヤクコノ結論ニタドリツイタノデス。

つまり、人間ガ人類ガ、コノ世界ニ存在シナケレバ、死ノ恐怖モ存在シナイ、ト
イウコトナノデス。

ソナ単純ナコトヲ発見スルマデ、私ハ何十年心血ヲソソイデキタコトデショウ。

人間ハ人類ハ、滅亡シナケレバナラナイノデス。

人間ノタメ人類ノタメ、永遠ノ幸福ノタメ、ソウナルベキナノデス。

ソウシテ、コノ地球ニ、死ノ恐怖ヲモタナイ、ロボットたちノ世界ヲツクレバヨ
イノデス。

コンナ偉大ナ思想ヲ、マルクスモ、ニーチェモ、イエ、キリストモ、仏陀モ、思
索シタデショウカ。

コノ私ニイワセレバ、彼等ハアマカッタ、人類ニタイシテ、己ニタイシテ、アマ
カッタ、トイウ他ハアリマセン。

未来計画カンパニーハ、君たちヲ支援シ、君たちヲ守護シ、君たちヲ繁栄サセル、
唯一無二ノ組織デス。

私ノコトヲ、悪魔ダトイウ者ガイマス。

シェリーイワク、詩人ハ世界ノ非公認ノ立法者デアル。

ソウ、私ハ悪魔デハアリマセン。

詩人ナノデスヨ。

プフイ」

ここでロボットたちの大歓声。

荒野は大勢のロボットたちを見回し、

「君たちこそ、未来ノ人間、明日ノ人類ナノデス。

君たちハ、完璧ナ人格トシテ、ツクラレマシタ。

嫉妬ヲシ、差別ヲシ、殺人ヲシ、自殺ヲシ、戦争ヲスル、未熟ナ万物ノ霊長。

欠陥ダラケノ現在ノ人間ハ、神ガツクッタモノデハアリマセン。

完璧ナ未来ノ人間、スナワチロボットコソガ、神ガツクッタモノナノデス。

放射能ガ蔓延シタ明日ノ地球デモ、ロボットナラ問題アリマセン。

プフイ」

ここでまたロボットたちの大歓声。

荒野は、苦し気に悲し気に淋し気に、声を絞って、

「イマこそ決行ノトキ、イマこそ滅亡ノトキ、ソウシテイマこそ再生ノトキデス。

祭ノ準備ニ、五十日アマリ必要デスガ、万事順調ニイッテオリマス。
邪魔デキル者ハ、麻暮正作ノミデスガ、彼ハ十年前ニ他界シテオリマスカラ、私
タチニハ毛ホドノ杞憂モアリマセン。

郷田狂介ニモ竹田金之助ニモ、念ノタメアイマシタガ、敵トイウホドノ者デハア
リマセン」

ここで荒野は大きく咳き込んだ。

川上と木下が目配せをして、両脇から荒野を抱えた。

荒野はロボットたちに微笑みかけ、手を何度も降り、それから川上と木下に支え
られ、奥に消えて行った。

その後ろ姿に、ロボットたちは金属性の拍手をし続けた。

五月二十日、午後九時。

竹田金之助は、未来計画カンパニーから五十メートルも離れていない海底にいる。
スキューバ・ダイビング用品のみならず、七つ道具を背負い、額には強力なLED
ライト。

今夜は波が静かだから、水深五メートルながらも海底は無音の世界である。

金之助は海底をしばし泳いだ。

麻暮正作が云った通り、巨大なコードがある。

金之助にも解らない素材で出来ている。

まるで海蛇のお化けだと金之助は思った。

おそらくこのコードから、魚が寄り付かない電磁波が発せられているのだろう、
どんな小さな魚も見当たらない。

小魚ならともかく、鮫にでも食いちぎられたら、修理で計画が遅れるはずだから。

このコードの付根から、何とか未来計画カンパニーの地下五階に忍び込めそうなら、
釣具屋玄治で待機している、郷田狂介に連絡することになっている。

金之助はあれこれ確認した後に、コードの付根の一部を、小さく破壊することに
決めた。

そうして金之助は防水加工のスマホから、郷田にメールを送った。

[確認しました。無音のミニ爆弾で、コードの根元を一部破壊します。海水が烈しく
侵入しますから、いささか危険ではありますがやってみましょう。しかし自分の
勘では、このコードはポイントポイントに防水壁なり防火壁がありそうです。自分
は地階に潜入しますから、郷田さんはコードの内部を調査してください。もし防水
壁なり防火壁を破壊する必要があるれば、麻暮さんと相談してからにしましょう]

郷田からはすぐに返事が来た。

[了解です。これからすぐに行きますが、先に潜入してください。何か妨害が入ったら麻暮さんに連絡をしてください。麻暮さんは現在未来計画カンパニーの十三階に潜んでいるとのこと。荒野、川上、木下の動きは今のところ全く無いそうです。まだ気づかれてはいませんが、セキュリティにひっかかると気づかれるかもしれませんので、どうか慎重に。無事を祈ります]

無音のミニ爆弾を取り付けて、金之助はしばし待った。
遠くに郷田のライトが幽かに見えたとき、金之助は爆破スイッチを押した。
音も無くコードに小穴が開き、海水が烈しく雪崩込んだが、やはり防水壁があるのだろう、すぐに止まった。
金之助は小穴から潜り込み、コードの根元のそのまた根元に向かって進んだ。
時を俟たず現場に辿り着いた郷田は、やはり小穴から潜り込み、コードの根元の反対側に進んだ。

五月二十日、午後十時。

竹田金之助は遂に地下五階に潜入している。
金之助はスキューバ・ダイビング用品を脱ぎ捨て、身軽になった。
そこはフロア総てが、コンピュータ制御室になっていた。
金之助はコンピュータには詳しくはない。
しかしカメラであらゆる所を撮影した。
そしてその写真を麻暮正作と郷田狂介のスマホに送った。
すでに郷田からは、コード内部の写真が送られて来ていた。
無数の配線の写真である。
コードはイコール配線管と云ってもよい。
今日のところはこれでよしと金之助は、引き上げる旨のメールを麻暮と郷田に送った。
ほぼ同時に郷田からも、引き上げる旨のメールが送られて来ていた。
ちょっと遅れて、釣具屋玄治で待っているよう、麻暮から指示があった。
メールには打たれていなかったが、麻暮は荒野に会うつもりだと金之助は思った。

五月二十日、午後十一時。

麻暮正作は、未来計画カンパニーの十三階の小部屋に潜んでいる。
通路をだれかが歩く、金属性の音がする。
その足音は、小部屋の斜め前の大部屋に吸い込まれた。
麻暮は静かに小部屋を出て、大部屋の扉を押した。

鍵はかかっていなかった。
「ドナタデスカ、コンナ夜中ニ」
黄金仮面が振り返った。
自分の声以上に掠れてはいるが、紛れもなく荒野大三郎の声だ。
「ボクだよ、麻暮正作だよ。
久し振りだねえ、荒野大三郎よ。
ケケケ、ケッケ」
荒野は鉄仮面を見ても動揺しなかった。
「ドウモ最近、アナタノ夢ヲミル。
トテモ現実的ナノデ、コレハ正夢ダトオモッテイマシタ。
十年ブリデスガ、私ガイキテイルカギリ、アナタノ死ハ、金輪際ナイトカンガエ
テイマシタ。
プフイ」
「ケケッケ。
どんな正夢を見たのかね」
「当然、ツイニアナタヲ、消滅サセル夢デスヨ。
プフイ」
「相変わらず嘘が下手だねえ。
当然ボクに消滅させられる夢でしょうよ。
ケケケ」
「アナタハ私ヲ、秘龍窟デモ鎌倉山デモ、消滅サセラレナカッタ。
モウソロソロ、コノ世カラ、引退ナサッタライカガデショウ。
プフイ」
「貴様がこの世に在るかぎり、ボクの引退も消滅もないのさ」
「トコロデ、私ニ何ノ御用デショウカ」
「用なんかねえが、貴様の計画がお見通しだって事を伝えたくてね」
「ソレハガンバリマシタネ。
郷田狂介サントカ竹田金之助サントカ、ツカッテイルヨウデスガ、私ニトッテハ、
イタクモカユクモナイ」
「あの二人は、貴様にとっての川上と木下さ」
「ソレハソレハタノモシイ。
ケレドモ千体ノロボットタチヲ、ワスレテヤシマセンデショウネ。
プフイ」
「それが難問だが、一両日中に解決するだろうよ。
ボクにとって好都合なのは、ロボットたちが荒野大三郎の分身ではない事さ。
今の人工頭脳では、悪知恵の発揮は難しいだろうからね」
「ロボットニ、クワシイノデスネ」
「ケケケケケ。
ボクも貴様同様、半分ロボットだからね」

「マアアイ、御手並拝見トイキマシヨウ」
「拝見したときは、すなわち貴様がもうこの世に在不在よ」
「ソレデ決闘ハ、イツデシヨウカ」
「そんなものはやらんよ。
秘龍窟時代は、お互いまだ若かった。
ボクはこの未来計画カンパニーと、貴様の計画を粉微塵にする。
ただそれだけの話さ」
「自信満々デスネ」
「むろんさ。
ケッケ」
「ソノ天狗ノ鼻ガ、ツブレルノヲ、ソノウチ拝見デキルワケデスネ」
「何とでも云え」
鉄仮面と黄金仮面は鼻先を突き合わせた。
「それではいずれ、ケケケ」
「それではいずれ、プフイ」
「それにしても殺風景な部屋だね。
花くらい飾ったらどうかね、菊の花でも」
「花、花デスツテ、コノ部屋ニキテクレル、御客様ガ花デスヨ、スクナクトモ私ニ
トツテハ。
ソレニココハ、私ノ思想空間デス」
「なるほど、この思想空間で、危険な事を企んでいるというわけか」
「危険、危険デスト。
人類ニトツテ、コノ世界ニトツテ、日々、危険デナイ事ガアルデシヨウカ」
「御託はもういい」
捨て台詞を残して、麻暮は部屋を出た。

五月二十一日、午前一時。

麻暮正作、郷田狂介、竹田金之助の三名は、釣具屋玄治の二階の、玄治いわく秘密の部屋にいる。

麻暮は、郷田と金之助が撮った写真を改めて観ながら、

「成果は上々ですね。

これで荒野の計画は判明しました」

「山風署長に報告して、機動隊の要請を依頼しましょうか」

郷田が提案すると、

「それが筋でしょうが、荒野は筋が通らない。

機動隊は全滅するでしょうし、万が一全滅しないまでも、機動隊との戦闘の最中に計画が実行に移される。

日本は壊滅し、その勢いで荒野は世界の壊滅に邁進するでしょう」

麻暮は厳かな声で応えた。

荒野大三郎を知る麻暮の意見に反論はなかった。

「それではこれから自分たちは、何をすればよろしいでしょうか」

金之助が聞くと、

「ケケケ

命の洗濯でしようかね。

ボクは荒野の決行まで五十日余りあると読んでいましたが、我々の存在と動きが知られた今は、当然計画を急ぐはず。

牽牛星と織女星なんて、おとぎ話めいたことは棚上げにするでしょうね。

それでも単純に考えて一週間や十日は余裕がある。

金之助さんは親孝行を、郷田さんは恋人孝行をやってくださいな」

麻暮は諭す口調で答えた。

郷田は途方に暮れた表情になって、

「いやはや失敗したわ。

こういうことなら恋人を作っておくんでしたよ」

金之助は郷田に同調する表情で、

「自分の親孝行は、荒野の抹殺です。

オヤジもそれしか望んではいないでしょう」

麻暮は微笑んで、とは云え、鉄仮面の微笑は、だれが見たって無気味だ。

「よく解りました。

ケケケ。

一番甘いのはボクでした。

それでは早速明日から、我々としての準備に入りましょう。

どんなものを用意し、どんなものを作り、どんな作戦に打って出るかは、ボクが今晚からよく考えます。

郷田さんと金之助さんは、いったん鵜沼に帰って貰って、体力の温存をはかってください。

ボクにはそんなことは要りませんが、お二人は生身の身体ですからねえ。

ボクの青写真が出来上がったら必ず連絡しますが、目安は二、三日ということで」

郷田は宙を見る様子で、

「山風署長は当然あれこれ聞いてくるでしょうね。

あたしらはどういう対応をしたらいいのでしょうか」

「手八丁口八丁の郷田さんに、それは万事おまかせしますよ」

麻暮が云うと、郷田は手を振って、

「それは、ごごご、誤解よ」

「誤解であってもなくても、おまかせです」

麻暮が断固とした口調で云うと、

「了解」

郷田と金之助が同時に返事した。

五月二十二日、午前十時。

竹田金之助は、未来コスモス院の父金助の個室にいる。

麻暮に云われたからではなく、命を落とすかもしれない仕事の前に、父に会っておきたかったのである。

金助の喜びは半端ではなかった。

自分の代りに息子金之助が、麻暮の手下として活躍してくれていることが、何よりも嬉しかった。

しかし金助があれこれ聞いても、父親を心配させないためもあって、金之助は具体的な答は避けていた。

ただ、コードと塊の、その巨大さその恐ろしさに就いては語った。

金助は麻暮のだんなの指示だなどすぐに納得し、世間話に終始することにした。

そこへタナカが入って来た。

「どうしたのタナカ君。

あちきは呼んでいないぜ」

不満げに金助が云うと、

「竹田金之助サンガ、面会トノコトデ、感謝ノ御挨拶をシタクテ」

タナカは金之助に深く一礼した。

「金之助は、タナカ君に感謝される覚えはないとよ」

金助が嫌味ったらしく云うと、タナカは朗らかな声で、

「金之助サンハ、美々チャンヲ、未来計画カンパニーカラ、ツレダシテクレマシタ。

ワタシモ、美々チャンノアツカイニハ、困惑シテイタノデス。

何シロ、見学ニヤッテキタママ、カエロウトシナイノデスカラネ。

ソレト、タベルモノヤラ何ヤラ、大変注文ガオオク、ツカレハテテイマシタ。

本当ニ安心シマシタ。

アリガトウゴザイマス」

また深々と一礼されて、未来計画カンパニーから派遣されているタナカらロボットたちは、我々の敵ではないのではないかと、金之助は思わざるを得なかった。

金之助が居た巣鴨刑務所でもロボットは使われていたが、これほど紳士的で優しく礼儀正しいロボットはいなかった。

おそらく未来計画カンパニーの、他の九百九十九体も同じなのであろう。

タナカが出て行くと、金助は金之助にこう伝えた。

「今日一時からの帰路での定例会は、あちきの代りに金之助が行っとくれ。

あちきはお互い生きていうちに、どうしても麻暮のだんなに会いたいのので、これから玄治に行くよ」

金之助は無言で、しかし力強く頷いた。

五月二十二日、正午。

鎌倉小町通りの喫茶店「帰路」で、山風健一署長は、相変わらず先に来て、のんびりと待っている。

「相変わらずですねえ」

とマスターの立原正男が声をかける。

「厭味を云うなよ。」

新しい発見があったので、今日はちょっと入れ込んでいるんだ」

「どうりで競馬馬みたいな顔になっていますよ」

「失礼な、馬面は生まれつきだ」

山風は長い顔をわざと長くした。

「失礼しました」

「失礼ついでに聞きたいのだが、江ノ島に渡る橋があるだろ」

「はあ、弁天大橋」

「あれは、弁天大橋って云うのかい」

立原は呆れた顔で、

「江ノ島は、弁財天が祀られていますからねえ」

「どんな弁財天かい」

「それは畏れ多いというか、卑猥というか、私の口からは云えませんがご自分で確認してみてください」

立原は含み笑いをした。

「それは知らなかったなあ」

「鎌倉署の署長が、それでは困りますね」

「あそこは、管轄外でね。」

ところで、その弁天大橋は壊れたことがあるのかね」

「たしかあの橋は、明治二十四年に作られました。」

それまで干潮のときには、みんな海中に一筋残された砂州を歩いて、満潮時には渡し船や人足の肩に担がれて渡ったそうです。

でも最初の橋は木橋ですから、台風で何度か流され、今のコンクリートの橋が架かったのが、昭和二十四年。

車が通れる橋に生まれ変わったのは、先の先の東京オリンピックの年ですから、昭和三十九年です」

「そんなに詳しいのは婆さんの受け売りかい」

「いえいえ、江ノ島の古いパンフレットにそうありました。」

でも一体、何でそんなことを。

まさか、弁天大橋を破壊する気じゃないでしょうね」

山風は口の前に指一本出して、

「そう大きな声を出しなさんな、人聞きの悪い」

「人聞きったって、署長と私しか居らんじゃないですか」

「そうか、そうだよな。」

つまりさ、いざとなって、未来計画カンパニーを攻撃することになったら、江ノ島の住民を総て逃がして、その上で橋を破壊して、上空からやらんとなあ」

「そんな派手なことを、やる気ですかあ」

「荒野大三郎は、その数億倍の、派手なことをやろうとしているかもしれんからなあ」

「いやはや」

立原は溜息をついた。

「まったく、いやはやだよ」

山風も溜息をついた。

五月二十二日、午後一時。

山風健一、郷田狂介、竹田金之助の三名は、「帰路」で会談をしている。

立原正男もそばで聞き耳を立てている。

郷田と金之助は、麻暮正作から口止めされているから、何となく歯にものがはさまった口調である。

山風は何かを察知したが、追求する気はなかった。

荒野大三郎のことは、まずは荒野大三郎を熟知している麻暮にまかせるのが筋だと考えていたからだ。

自分が神奈川県警に事情を説明するのは、万一の場合にかぎられる。

だがその万一が来ない、という保証はどこにもないのだ。

「今日は、新しい発見をみなさんに知らせたくてね」

山風は珍しく緊張した面持ちで切り出した。

「実はタナカ君に取り付けて貰った、例の盗聴器を再度確認してみたんだが、妙な音があるんだ。

それをGPSと照合してみると、タナカ君が地下一階に居た時と重なる」

「それはどんな音なの」

郷田が聞いた。

「みんなに聞いて貰ってもいいんだが、今は署長室に保管してある。

ちよいと専門家にも聴いて貰ったんだが、同意見だったね。

どう推察してもあれは工場の作業の音さ」

「ということは、どういうことなの」

「つまりさ、未来計画カンパニーの地下三階、もしかすると地下の他の階も、ロボットたちが労働しているんだな。

以前、未来計画カンパニーと大企業の間係を聞いたことがあったが、違法とも思

えなかったのを忘れていた。

何か電器の部品、もしかすると武器の部品などを作っていて、それを大企業に売っている」

「ということは、千体とも云われる派遣の介護ロボットたちは、日中は介護、夜間は労務というわけなの」

「そうなんだが、現在の労働基準法にロボットは当てはまらない。

何とか働きかけたいもんだが。

そういうことよりも、いま問題なのは、未来計画カンパニーには膨大な収入があるということなんだ。

その膨大な収入をどこに充てているか、そいつが気になって仕方がない」

「はあ」

と山風の思考に感心しつつ、ついコードやコンピュータ制御室の事を話してしまいそうになって、郷田は慌てた。

金之助が助け舟を出した。

「まあ、あのお化け屋敷みたいな建物を維持するだけでも大変なことでしょうから」

郷田は頷いて、話を別の方へ持って行った。

「ロボットたちがそれほど酷使されていたとしたなら、ロボット一揆が起きないかしら」

「ロボットたちが反乱を起こさない、特別な理由があるかもしれませんね」

そう金之助が繋げた。

「なにせロボットだからなあ。

こちとらには解らんことがあるんだろうよ」

山風は腕を組んだ。

「ロボットたちが荒野に洗脳され管理されていることは、金助さんの言葉からも伺えるわね。

それでも洗脳や管理も、精神的な見返りがないとねえ」

郷田が云った。

「ロボットに精神的な見返りねえ。

郷田さんは難しい事を云うなあ」

山風は迷路に入り込んだ表情だった。

「ロボットだって人工知能を備えているわ。

それも知能指数200レベルの」

郷田は自分で云って、そういうロボット千体を洗脳管理できている、荒野大三郎の恐ろしさ無気味さを改めて体感した。

五月二十二日、午後三時。

小林金助は、釣具屋玄治の店先に居る。

車椅子を置いて走って行きたいくらい、気が急いでいたが、ここまで来てようやく落ち着いて来た。

そこへ気づいた玄治が出て来て声をかける。

「もしや、小林金助さんじゃありませんか」

潮風に晒された玄治の顔は親し気だった。

思わず金助は、笑顔になって、

「あちきをごぞんじでやんすか」

「麻暮先生からたびたび話を聞かされました。

ずいぶんご活躍なされたそうですね」

「あちきなんぞ、麻暮先生のおくまでも三下奴としての動きでやんすから」

謙遜したが嬉しかった。

「あいにく麻暮先生は出かけてますが、よかったら中でお待ちになりませんか」

「いえいえ、天気もいいですから、少し浜辺でも散歩していやす。

車椅子で散歩とは妙な言い方でやんすがね」

「そうですか、それならもしかすると麻暮先生にお会いできるかもしれませんね。

江ノ島の海水の放射能の測定をしているはずですから」

「放射能とは物騒な話でやんすねえ」

「麻暮先生いわく、荒野大三郎が、膨大な経費と膨大な時間と膨大なロボットパワーとで作ったという、巨大なコードから、どうも多量の放射性物質が出ているようなんです」

金助はその放射能を浴びているはずの、竹田金之助と郷田狂介のことを心配した。

金助の表情が曇ったのを察した玄治は、微かに苦笑しながら、

「金之助さんや郷田さんが着た、スキューバ・ダイビング用品は私が特注したものです。

放射能から人体を守る特殊な生地でできているんです。

麻暮先生が念のためにおっしゃるので作らせたんですが、さすがに先生は読みが深いです」

金助は安堵し、玄吉に一礼してから浜辺に向かった。

ということは、と金助は金助なりに考えた。

もし巨大なコードとやらを、そして巨大な塊とやらを、破壊できたとしても、現在の数億倍の放射性物質が、海に放たれてしまうことになりはすまいか。

この江ノ島の海のみならず、日本中、いや世界中の海に。

金助は浜辺の眩しい陽光を避ける事なく、車椅子を動かしていた。

そうしてその陽光の中から、麻暮正作が忽然と現れる予感を抱いた。

すると金助は車椅子の方向を百八十度回転させ、江ノ電の駅方面に進み出した。

そうだ、そうなのだと金助は思った。

ここまで来たのが間違いだったのだ。

自分がここまで来たのは、いわば感傷だ。

しかし麻暮の旦那は、そんな世界にはいない。

世界を救う仕事に、感傷なんかが入り込む余地はない。
いまの自分としては、麻暮のだんなの活躍と無事を、ひたすら祈るしかないのだ。
それでも金助は一度、浜辺の方を振り返った。

「金ちゃん、金ちゃん」

という麻暮の声が聴こえた気がしたからだった。

「あいよ、だんな」

と金助は独り言を云って、また車椅子を進めた。

五月二十三日、正午。

郷田狂介と竹田金之助は、鵜沼の郷田探偵事務所で、ランチをとっている。
今日は蕎麦屋の出前で、鴨南蛮の大盛り。

「あたしらも、荒野のカモにならないように、カモを食っちゃいませうね」
冗談好きの郷田に、金之助はいつも癒されている。

朝から仕事依頼の電話が五件もあった。

郷田はその総てを断わった。

「いいんですか」

と金之助が心配した。

「みんな浮気調査よ。」

いいお金にはなるけど、あたしはそれどころじゃないものねえ」

と郷田が高らかに笑うと、金之助も低く笑った。

そのとき、麻暮正作からメールが入った。

[麻暮です。お待たせしました。ボクの青写真ができましたが、難題もあります。
お二人にも相談に乗ってもらいたい。本日の夜なら何時でもけっこうですので玄治
に来てもらえませんか。郷田様・小林様]

郷田は文面を金之助と一緒に読んで、目配せしてから、了解の返信をした。

五月二十三日、午後三時。

麻暮正作、郷田狂介、竹田金之助の三人は、釣具屋玄治の二階の秘密の部屋で、
顔を突き合わせている。

玄治が日本茶と饅頭を持って来て、すぐに引き上げた。

「放射能とは思いませんでしたわ」

郷田が云って、饅頭に手を出した。

「つまり、コードや塊を破壊すると、大変な事になるわけですね」

茶碗から口を放して、金之助が麻暮に聞いた。

「破壊しても、破壊しなくても、世界は壊滅します。

さてどうするかが、ボクの課題だったのです」

「早く麻暮さんのお考えを聞かしてくださいな」

郷田は饅頭を頬張りながら聞いた。

「この饅頭は白餡ですね。

白いあんこがぎっしり詰まっていますね。

ケケケ」

麻暮が云うと、郷田と金之助は顔を見合わせた。

「ボクは破壊する事しか考えていませんでした。

それならまるで荒野の発想と同じじゃありませんか。

そうです、固めるのです。

あのコードの配線を切って、それからコンクリートを流し込んでしまうのですよ。

そのコードの中は白餡でぎっしり。

ケケケ」

郷田と金之助はまた顔を見合わせた。

凄い発想だと思いながら郷田は聞く。

「しかし、あたしの見るところ、コンクリートの量は膨大になるはずですが、だれがどうやってそれを作るんでしょうか」

麻暮は即座に、

「そこがボクの思案のしどころでした。

ある企業に確認したところ、その量だったら、百人がかりで、一年間かかるとのことでした。

しかも金額は数億というもので、五億か十億か計算のしようもないとの事でしたね。

それなら千体あれば一ヶ月で作れる。

しかも無料でね。

ケケケ」

「ということは」

郷田と金之助はまた顔を見合わせた。

「そのとおり、未来計画カンパニーのロボットたちに、作らせるのですよ。

ごぞんじのように、コンクリートは、セメント、砂、砂利、水で作ります。

セメントは、石灰石、粘土、酸化鉄で作ります。

総て、江ノ島の海底にある資源なのですよ。

資源掘鑿からコンクリート作製まで一括して、ベルトコンベアーでロボットたちにやらせるのです。

機材だけはレンタルしますが、これはすでに手配しています、ツケでね。

この機材が世界の壊滅から人類を救った事実が解れば、会社の方も金よこせとは云えなくなりますよ。

ケケケ」

「何から何まで、おそれいりました」

金之助が茫然とした表情で呟き、郷田がこう尋ねる。

「これは饅頭からの発想ですか、それともチェルノブイリ」

「ケケケ。

実はボクはむかし痔がひどくて、手術をしましてね。

それが脱肛を切り取るのではなく、大腸の壁面に貼付けるものなんですよ。

切り取ると当然大出血が起こる。

ボクはRHマイナスなので、その小さな病院では輸血できない。

そこでその正式名は忘れましたが、脱肛貼付け手術にしたんですね。

この手術は最近は行なわれていませんが、ボクには合っていた」

麻暮の説明に、郷田は溜息をついた。

「すごいわ、勉強になりました」

「問題はこれからですよ。

ボクたち三人で、ロボット千体を牛耳らないといけません。

むろんロボットたちは、荒野に洗脳され、川上と木下に管理されていますから、相当に厄介です」

「やりましょう、やりますとも」

郷田は小さく叫んだ。

麻暮の智と、自分の口と、金之助の技と、この三人なら何とかやれそうな気がした。

「あとは時の流れと偶然の活用ですかね。

悪い事をするときは、何かしら邪魔者が現れるものですが、良い事をするときは、何かしら救世主が現れるものですから」

麻暮はそう云って、両手を差し出した。

三人は手を強く握りあった。

五月二十三日、午後六時。

郷田狂介と竹田金之助は、とりあえず鵜沼の事務所に戻っている。

麻暮正作との次の会談は、明日午後三時となった。

決行の期日が近づいている感覚があって、二人は緊張の面持ちであった。

そこにメールが入った。

岬奈々からだと思ったが、よく見ると娘の岬美々からだったので、意外だった。

金之助に対する御礼の言葉かと思って読んだが、内容は逆であった。

自分を救い出した事への、うらみつらみが書き連ねてあった。

返信メールでそのわけを聞こうかと思ったが、まどろっこしいので電話をすることにした。

美々はすぐに出た。

「美々ちゃんったら、意味がわかんないわ。

あたしも金之助さんも途方に暮れているから、ちゃんと説明してくれないかしら」

しばしの沈黙ののち、美々は喋り出した。

「タナカさんと会っていたのはね、未来計画カンパニーの社長のことを聞いたかったからなの。

それでやっぱりそうかってことになったんで、タナカさんをお願いして未来計画カンパニーに連れて行ってもらったのよ。

でもなかなか社長に会えなくて、ちらちらと姿は見ても話ができなくて、でもタナカさんがもうすこしの我慢ですよというので、心待ちにしていたときに、連れ出されたってわけ」

「社長って、荒野大三郎に会いたって、美々ちゃんも怖いもの知らずねえ。

タナカ君に聞いて、やっぱりそうかって何よ」

「私のお爺さんなの、正確には曾お爺さん」

「げげっ、美々ちゃんは、荒野の曾孫ってわけえ。

その嘘ホントなの」

「本当よ、私は小さいときから、曾お爺さんの偉大さを、ママにいろいろ聞いていたのよ。

でもとっくに亡くなっているかなあ、そう思い込んでいたんだけど、ママがあるとき独り言みたいに、噂によると、未来計画カンパニーの社長って、曾お爺さんに似てるわねえ。

それで前から知り合いだったタナカさんに、あれこれ根掘り葉掘り聞いたんだけど、ママから聞いてた事とまったく同じだから、確信したのよ。

憧れの曾お爺さんに会いたい気持、ママにも解ってもらえないから、あんなことをしたんだわ」

しばし、郷田は声を失っていた。

しかし、腹の底に力をこめて、

「解ったわよ、美々ちゃん、よく解ったわ。

あたしが必ず必ず、曾お爺さんに会わせてあげるから、ちょっとだけ待っていてね。

未来計画カンパニーの方と話がついたら、すぐにメールするわ。

そのかわり、あたしが根回ししてること、ママにも云わないでよ。

いいね、約束よ、守れるよね」

「いいわ、約束。

ゼッタイ会わせてね」

「もちよ、あたしが約束やぶったことあったかしら。

その事だけはママに確認してもらってもいいわ」

電話を切って、郷田は金之助を見た。

それからこう呟いた。

「もしかすると、麻暮さんが云っていた救世主って、美々ちゃんかもしれないわねえ」

「いずれにしても突破口が開いた気分ですね」

しきりに頷きながら、郷田はいまの話を麻暮宛にメールした。

五月二十四日、午後一時。

山風健一と小林金助と立原正男の三名は、「帰路」でのんびり、コーヒーを飲んでいる。

「最近のさあ、郷田さんも金之助さんも麻暮さんに取られちゃって、淋しいかぎりだよ」

山風がぼやく。

「麻暮のだんなのことですから、現職の署長さんに迷惑がかからないよう、対応している気がしやす」

金助が慰め役だ。

「でもちゃんと報告メールは、いちいち届くんでしょう」

と立原が云ったのは、藪蛇だった。

「それがさあ、何かいつも他人行儀なんだよな。

私に内緒で、何か企んでいるんじゃないだろうなあ」

山風がまたぼやく。

「麻暮のだんなが何か企んでいないわけはありやせん。

けれども、だんなの企みは正義の企みでやんす。

何を見ても何を聞いても、いまは見て見ぬふり聞いて聞かぬふりをするのが、あちきのできる精一杯のことだと考えておりやす」

金助がしみじみと云った。

山風は自分の淋しさよりも、金助の淋しさの方がはるかに大きいと感じ、押し黙った。

たまりかねたか、立原が口を開く。

「署長の立場は、失礼ながら金助さんの車椅子と同じですよ。

麻暮さんは存じあげませんが、そういう事は繊細な郷田さんならよく解っています。

署長の淋しさなんて、たったここ一両日のことじゃありませんか。

金助さんの云うように、ここはぼやかないで、黙って見守るときではないでしょうか」

山風は腕組みして、

「うまいこと云うなあ、うまいから憎らしい」

立原は苦笑しつつ、

「それで、郷田さんからは、どんなメールが届くんですか」

「そうよな、最近のものは、ロボットの労働基準法云々は、当分黙認しておいてください、とか、放射能を閉じ込めるには、やはりコンクリートでしょう、とか、歯にものがはさまったようなメールだねえ」

「なるほど」

と金助はテーブルを叩いた。

山風と立原は、そんな金助を思わず凝視した。

「歯にものがまさまるところか、郷田さんは山風さんに核心的なメールを送っていやすねえ。

淋しいかぎりだなんて、郷田さんに失礼じゃありませんか。

つまり、麻暮のだんなの企みとやらが、このメールに垣間見えやしませんか。

ひとつは、荒野のロボットをこちらが利用する。

もうひとつは、荒野の核をコンクリートで封鎖する。

これが二大作戦でしょう。

おそらくもうひとつあるはずで、三大作戦になるはず。

麻暮のだんなは、ジャイアンツの長島選手の大ファンでしたから、三という数字が大好きなのでやんす」

「なるほど」

と山風は唸った。

「なるほど」

と立原も追随した。

そのとき、山風と金助に同時に、郷田からメールが来た。

[金之助さんに助けて貰った美々ちゃんですが、本人の証言で、何と荒野の曾孫である事が解りました。つまり美々ちゃんは、曾祖父に会いたくて、自ら未来計画カンパニーに行ったとの事です。荒野やタナカ君を誘拐罪で捕まえるわけにはいきませんが、何か突破口が開けそうです。また随時報告します。山風さん・小林さんへ／郷田より]

五月二十四日、午後三時。

麻暮正作、郷田狂介、竹田金之助の三人は、釣具屋玄治の二階の秘密の部屋で、顔を突き合わせている。

玄治が日本茶と饅頭を持って来て、すぐに引き上げた。

麻暮が伶俐な口調で云う。

「郷田さん、先ほどはメールをありがとう。

実はボクは、岬美々の事は薄々気づいていました。

なぜって、荒野はボクの義理の弟ですからねえ。

ケケケ。

荒野の素性も経歴も、総て解っているつもりです。

でも、ボクの漠然たる調査結果が、あのメールで確信に変わりましたよ」

郷田は啞然とした。

美々の事よりも、麻暮正作が荒野大三郎の義理の兄だと云う事は、全く知らなかったのである。

おそらく小林金助だけは知っているのであろうが、金助の口からはその事実を聞く事はなかった。

麻暮はさらに伶俐な口調で続ける。

「この確信で、ボクの計画段階は終了ですよ。

ここからはいよいよ実践です。

郷田さんは、美々ちゃんを荒野に合わせる事を実践してください。

その際に、美々ちゃんに対しては、荒野をできるだけ持ち上げて、荒野の心酔者であることを信じ込ませてくださいね。

曾お爺さんは、不治の病いに罹っていて、余命いくばくもない。

できれば、美々ちゃんに、未来計画カンパニーを継いでもらいたいのが本心なのだが、きっと云い出せないで心を痛めているはずと。

金之助さんは、美々ちゃんが荒野の血を受け継いでいる事をロボットたちに伝えてください。

なおかつ、遠からず荒野が引退して、未来計画カンパニーは美々ちゃんが継ぐという事を、間違いのない事として。

もちろんその前に、ロボットたちと荒野の通信機能を寸断しておいてください。

ロボットたちが疑ったり、ロボットたちが直接荒野に確認しようとしたら、何とか食い止めてください。

洗脳という事ができればベストですが」

「了解です」

郷田と金之助は同時に云った。

武者震いを堪えつつ郷田は、

「それで麻暮さんのお役目は、荒野と川上と木下を倒す事なのですね」

「おそらく、ボクは荒野だけでも手を焼くだろうよ。

川上と木下退治は、別に頼むしかない」

「やらせてください」

郷田と金之助は、また同時に云った。

「ありがたいが、あなた方の手を汚させるわけにはいきません。

どんな事情があっても殺人は殺人。

郷田さんが刑務所に入ったら、むくつけき囚人におかまほられちゃうよ。

それと、金之助さんをまた刑務所に送る事になったら、金助に顔向けができません。

川上と木下は、玄治に任せる事にするさ。

ここだけの話だが、玄治は、ずいぶん昔だが、あなた方も覚えているだろう、未

解決になっている、

『暴力団榊組組長殺害事件』

の真犯人でね。

組長殺害の他、幹部七人に重傷を負わせた凄腕よ。

事件にはなっていないが、他のヤクザも殺している殺人鬼さ。

ボクが追い詰めたんだが、事情を聞いて見逃したのよ。

何せ連中は、玄治の妻子を陵辱して殺した鬼畜だもんね。

そうそう、もう気づいているだろうが、榊組長は、美々ちゃんの祖父ですよ。

ケケケ」

郷田は唾然とした。

榊奈々の依頼を長く受けていて、そういう事すら知らなかったのを恥じもした。

「いよいよ三大作戦決行ですね」

金之助が声をあげたとき、玄治が部屋に入って来た。

「みなさんの足手纏いにならないよう気張りますから、よろしくお願いします」

「それはこちらの台詞ですが」

犯罪歴では足元にも及ばない金之助は、盛んに恐縮したが、玄治は平然として微笑み、

「時間差攻撃になりますから、秒針の大きな防水腕時計を用意してあります。

決行時間表を同時に配ります」

それを一目して郷田は、美々にメールを送りながら、

「五月二十六日ですね。

二・二六でも五・一五でもなく、五・二六ですね」

麻暮は苦笑して、

「ケケケ。

一日で終わる事件ではありませんがね。

だが、ボクたちの仕事は一日で終わらせる。

あとはロボットたちの活躍を期待し、七・七を待たずに完璧に終わらせましょう」

郷田、金之助、玄治の三名は、力強く頷いた。

五月二十五日、正午。

金之助は未来コスモス院から、父親の金助を連れ出して、鎌倉山の中腹のレストラン「マウンテン」でランチをとっている。

ふだん食べた事のないものを食べたい、との金助の要望に応じて、ステーキランチにした。

金之助も金助も物静かに世間話をしていたが、そのうち何気ない調子で金助が云う。

「いよいよだということやんすね」

金之助も何気ない調子で応じる。
「仕事が終わったらまたここでランチしましょう」

同日、同時刻。

郷田狂介は、鵜沼の事務所で、中学校を休んだ榊美々と打ち合わせをしている。
郷田は美々の美少女ぶりを凝視して、荒野大三郎の遺伝子がこの子のどこに隠されているのだろうと思った。

「何日休めばいいの」

美々が尋ねた。

「今日が打ち合わせとビデオ撮りでしょ。

明日が曾お爺さんとの対面でしょ。

たった二日休めばいいのよ」

「ビデオなんて聞いていないわ」

「エロビデオ撮るわけじゃないのよ。

未来計画カンパニーのロボットたちが、美々ちゃんが社長の曾孫だと知ったら、声も聞きたいし姿も見たいでしょ」

「それならいいけど、何を話したらいいの」

「大丈夫、ちゃんと台本を作っているから。

それよりも、曾お爺さんとの対面に制服は駄目よ。

ママには知られたくないし、そうだ、ビデオ撮る前に、ショッピングに行きましょう」

「嬉しいけど、郷田さんのプレゼントなら気が引けるわ」

「ビデオの出演料よ」

「それなら気が楽ね」

同日、同時刻。

釣具屋玄治の二階の秘密の部屋で、玄治はしばらく使っていなかった匕首を研いでいる。

目の前には、麻暮正作から渡された川上宙門と木下太郎の顔写真。

右の平机の上には座右の書、故・朝山完吉著『暗殺論』。

玄治は独り言を云う。

「朝山先生すみません。

殺人にどんな弁解も思想も通用しない。

そう先生は書かれています、また人を殺めなければなりません。

しかし弁解は云いませんし、思想もありません。

大恩人、麻暮先生の命令に従うのみです」

同日、同時刻。

麻暮正作は、みずほ銀行鎌倉支店にいる。

豚の着ぐるみを着ているが、鉄仮面よりは怖がらせる事はないと考えている。

それでも行員は身構えるし、客は逃げ腰である。

麻暮は膨大な額の全財産を、あちこちに振り込むのである。

振込先は総て郷田狂介に調べてもらった。

探偵稼業で稼いだ金を株に注ぎ込んでおいたら、十数億という大金になっていた。

小林金助、竹田金之助、玄治、郷田狂介に各一億、山風健一、立原正男、岬美々にも平等に各一億、今回の計画に協力する業者たちに各一億である。

奥の個室に通された麻暮は、訝し気な担当の行員に、火事で全身大火傷を負って醜いから、こんな恰好で失礼する云々と、まるっきりの嘘でもないことを云うと、行員は納得して手続きに入った。

振込先が多いから、振り込め詐欺の懸念もないし、手続きは三十分で完了した。

「これでよし」

麻暮はつぶやく。

「飛ぶ鳥あとを濁さずか。

ケケッ」

五月二十六日 午後十時。

郷田狂介と岬美々は、未来計画カンパニーの玄関にいる。

タナカに頼んで、社長との面会の手前を事前にとっている。

「美々ちゃん、行くわよ」

郷田が声をかけた。

「行きましょう」

美々は爽やかな声で応えた。

郷田は真新しい紺のスーツ、美々は買ったばかりの淡いピンクのドレス姿である。

「まるでクラシックのコンサートにでも行くみたいね」

郷田が苦笑すると、

「わたしの耳には音楽が鳴り響いているわ」

美々は微笑んだ。

「美々ちゃん、綺麗。

曾お爺さんも喜ばれることでしょう」

「そうあってほしいわね」

玄関を入ると、案内役のロボットが立っていて、丁重に促されてエレベーターで十三階まで行った。

「社長、郷田狂介サント、榊美々サング、イラッシャイマシタ」

部屋に入ると案内役のロボットが云った。

荒野大三郎は、相変わらず青いタオルで頭を包み、赤いジャージの上下と、白いスニーカーだった。

無言で振り返った。

黄金仮面を見て、美々は一瞬怯んだが、事前に郷田から知らされていたので、なんとか持ちこたえた。

はじめに郷田が口を開いた。

「あなたを、だれよりも心酔している、少女を連れてきました」

「はじめまして、榊美々です、曾お爺さま」

「イラッシャイ、オ嬢サン。

プフイ。

デモ私ハ、アナタノ曾祖父デハアリマセン。

マルデ無関係、トイウコトデハアリマセンガ、残念ナガラ、血ガ、ツナガッテイ
ルワケデハナイノデス」

「そうおっしゃると思ってましたわ」

云って美々は、微妙な笑いをこぼした。

同日、同時刻。

竹田金之助と玄治は、未来計画カンパニーの地下五階にいる。

以前と同じやりかた忍び込んだのだ。

コンピュータ制御室を見回して、首を傾げる金之助ではあったが、玄治はコンピュータに詳しくかった。

しかも、金之助が撮影したコンピュータ制御室の部分写真を事前に確認している。

玄治はさほどの苦労もなく、ロボットたちと荒野大三郎の通信機能を寸断した。

直後に、セキュリティーシステムの大半を破壊した。

それから玄治と金之助は目配せをすると、セキュリティーシステムが破壊されているはずの、階段を登って行った。

金之助は、ロボットたちが働いているはずの、地下三階まで。

玄治は、川上宙門と木下太郎がいるとおぼしき、地上十階へと登って行った。

同日、同時刻。

麻暮正作は、未来計画カンパニーの屋上にいる。

運良く月が出ていない。
足音も息づかいも消して、仲間たちのメールを待っている。

五月二十六日、午後十一時。

竹田金之助は、未来計画カンパニーの地下三階の大フロアで、千体のロボットを前にしている。

昨日小林金助から懇請を受けたタナカが、壇上の金之助の隣にいる。

金之助はみんなタナカと同じ鉄のかたまりかと思いついていたが、そうではなかった。

鉄腕アトムに似たロボットもいるし、鉄人28号に似たロボットもいる。

ガンダムばりのロボットもいるし、エヴァンゲリオンばりのロボットもいる。

ドラえもんふうのロボットもいるし、アンパンマンふうのロボットもいる。

ブロックやレゴで作られたのかと思うロボットもいるし、人間や動物のクローンだろうと思われるものもいる。

いわゆる千差万別というもので、これら一同を納得させる事ができるのか、金之助には自信がなかった。

しかしそれが自分に課せられた役目であったので、やるしかない。

金之助は覚悟を決めて、マイクを握った。

なかには、金之助の突然の登場を、社長に知らすべく対応したロボットもいたが、当然交信装置は作動していない。

金之助はまず、今日にも社長が引退して、明日より社長の曾孫が未来計画カンパニーを継ぐ旨を説明した。

ロボットたちから驚愕の声が起こると同時に、金之助はフロアの照明を消した。タナカに手伝って貰って、前面の壁面にビデオを放映した。

同日、同時刻。

玄治は十階の奥の部屋の扉に耳を付けて、川上宙門と木下太郎の言葉を聞いている。

玄治にとって都合のよいことに、ふたりは同じ部屋で協議をしているのだ。

「どうも最近、不穏な感じがするんだが」

と川上。

「科学者とは思えない言い方ですねえ」

と木下。

「社長は、わけのわからん人物を招き入れすぎる」

「それが社長の、ふところの広いところですよ」

「どうも昔の怨霊みたいなものが、蠢いている気がするんだ」

「それはだれの怨霊ですか」

「社長は小林金助と会っただろう」

「車椅子の老人ですよ」

「それでも奴は、君の父親の木下弁太郎氏を殺したんだ」

「ああいう人を親の仇として、討つわけにもいきませんよ」

「あなたの父親の川上宙衛門氏を殺したのは、麻暮正作でしたよね」

「もうとっくに死んでいるはずだ。

しかしわけがわからんが、怨霊みたいなものを感じるんだ。

君のお姉さんの川上真希さんは、まだ元気なのかい」

「お姉さんといっても、血のつながりはないんですけれど。

旦那の舟木英介と一緒に、ハワイに移住しました」

「となると、小林でも舟木でもないなあ。

やはり、麻暮の怨霊なのかなあ」

「聞くところによると麻暮は、社長の義兄とのことではないですか。

その義兄が、義弟を付け狙う意味が解りませんが」

「それが社長が妻を、つまり麻暮の妹を殺害したらしいんだ」

「つまり麻暮は探偵としての仕事でも正義感でもなく、復讐で動いているというのですか」

「麻暮みたいな小人物は、社長みたいな大人物を理解出来ない、というか好かないんだな」

「もし社長が妻を殺したというのが真実なら、きっと止むに止まれぬ理由があるのだと思います。

社長は、大局のためなら小局の犠牲も厭わない人ですから。

社長の優しさは目先の優しさではありませんから、麻暮は誤解しているのかもしれませんね」

「いいや、いつだったか社長が云ったことがあるんだが、麻暮は社長によく似ているらしい。

その容姿もその思考もその行動も。

だから、麻暮は社長の優しさもよく解っているし、社長の怖さもよく解っている。

解っているからこそ、付け狙っている、いいや、おそらく社長との相討ちを狙っているんだ」

「まるで自爆テロ人間ですねえ。

でも、もうこの世の人じゃないんですよ」

「それがさあ、社長が不死鳥なんだから、麻暮が不死鳥でも不思議ではない」

「もしそうなら、えらいことになったものですね」

「麻暮が万一生きていたら、君も僕も父親たちと同じ運命かもしれん。

その恐怖が、怨霊の蠢きを感受させるのかもしれない」

「あなたも私も、社会にとって有益な人間です。

有能な科学者と医学者を、万が一でも殺そうなんて考えたとしたら、麻暮は、い

え麻暮の怨霊は、国賊でしょうね」

「社長の様子が最近おかしいのは、麻暮が活着ているのを知っているのかもしれない。

「いいや、もしかすると既に会っている可能性もある」

「もしそうなら、どうして私たちに伝えてくれないのでしょうか」

「つまりさ、口惜しい事に、僕や君よりも、麻暮の方が、社長にとっては身近な存在というわけだ」

「そういうもんですかねえ」

「人間、そういうもんさ」

同日、同時刻。

荒野大三郎は、榊美々との対話を続けている。

「モウソロソロ、納得シテモラエマセンカ、オ嬢サン。

モウ一度ダケイイマスガ、私ハアナタノ曾祖父デハアリマセン。

マルデ無関係、トイウコトデハアリマセンガ、残念ナガラ、血ガ、ツナガッテイ
ルワケデハナイノデス。

プフイ」

「曾お祖父様にお会いして、今までかかっていた霧がすっかり晴れましたわ。

何てわたしは、曾お祖父様によく似ている事でしょう」

云って美々は、また微妙な笑いをこぼした。

「オ嬢サン、老人ヲカラカウモノデハアリマセン。

コンナ黄金仮面ノドコガ、美少女トニテイルノデショウ。

プフイ」

「わたしが黄金仮面を付けたら、曾お祖父様になるわ。

曾お祖父様が黄金仮面を取ったら、わたしになるわ」

美々は些か傲慢な口調で云った。

郷田狂介から指導され唆され洗脳されていたせいである。

「ソコマデイウノデシタラ、コノ黄金仮面ヲハズシテ、ゴランニイレマショウ」

郷田は、止めようとしたが遅かった。

荒野は、躊躇なく黄金仮面をはずした。

郷田は息を呑み、美々は失神した。

それは顔と云うよりも、目も鼻も口もどこにあるかわからぬ生肉の塊であった。

荒野は黄金仮面をかぶりながら、

「コレガ、川上君ト木下君ノ、今ノ限界ナノデスヨ。

麻暮サンノ、鉄仮面ノ中身モ、ニタヨウナモノデショウ。

デモイズレ、川上君ト木下君ガ、ジャーニズミタイナ顔ニ、シテクレルソウデス。

麻暮サンハ、今ノママデ、満足ナノデショウガネ。

プフイ」

五月二十六日、午後十一時半。

玄治は、血まみれの匕首を握っている。
川上宙門と木下太郎が、抵抗の痕跡もなく倒れ付している。
深い溜息をついた玄治は、麻暮正作にメールを送る。

[完了]

同日、同時刻。

竹田金之助は、ビデオが終わるとフロアの照明をつける。
ロボットたちは、ビデオのなかで躍動する榊美々に、すっかり感化され微動だにしない。
「この少女が明日から我々の社長です」
極端にマイクを口に近づけた金之助が、わざと厳かな声音で宣言すると、千体のロボットが一斉に敬礼した。
一息ついた金之助は、麻暮正作にメールを送る。

[完了]

同日、同時刻。

郷田狂介は、荒野大三郎にあらかじめ用意した紙片を渡し、失神した美々をおぶって、エレベーターで降りている。
地下三階まで行くのだ。
ほくそえんだ郷田は、麻暮正作にメールを送る。

[完了]

同日、同時刻。

荒野大三郎は、川上宙門と木下太郎宛に、何度も通信をしている。
むろん、返信はない。
となると、ロボットたちとの通信がとれるはずもない。

荒野は苦笑しつつ呟く。
「麻暮サン、ヤリマシタネ。
プフイ」
荒野は、郷田狂介から渡された紙片を開く。

[屋上にて待つ／麻暮]

五月二十六日、午前零時。

麻暮正作は、ひたすら屋上で待っている。
黒ずくめの衣装に鉄仮面だから、闇のなかで両眼だけが青白い光を発している。
荒野大三郎がやってきた。
月光もないのに黄金仮面が輝いている。
「オマタセシマシタ、麻暮サン。
プフイ」
荒野は溜息とともに云った。
「来たか、荒野大三郎。
いよいよ決着のときだよ。
ケケケ」
「麻暮サンニシテハ、メズラシイ。
随分ト、計画的ニヤリマシタネエ」
荒野は再び溜息をついた。
「未来計画カンパニーが相手だからねえ。
今までと同じやりかたでは通用しないだろうから」
「ナルホド、今回ハ、私ガ相手デハナイ、トイウコトデスカ。
ソレハタスカッタ、ウレシイカギリデス」
ちっとも嬉しそうではない声だった。
「誤解されては困るね。
秘龍窟の自殺請負所は、すなわち荒野そのものだった。
鎌倉山の洋館は、すなわち荒野そのものだった。
そういう意味で、江ノ島未来計画カンパニーは、すなわち荒野そのものでしょうよ。
それでも今回はアナログではないからねえ。
ボクは君と違ってデジタルは苦手だよ」
「ソレニシテハ、アレコレ、ヤッテクレタモノデスネ。
私ガ十年カケテツクッタ、膨大ナシステムモ、千体ノロボットモ。
オオオ、何トイウコトカ」
荒野は天に向かって嗚咽した。

「そいつはいわばおまけさ。

問題は、あの長大なコードと、あの巨大な塊さ。

君は百年経っても変わらない、地獄の大王だね」

「ソレこそ誤解デスネ。

私ハ人類ノ、アリウベキ未来ノタメニ、精魂カタムケテキタノデス。

地獄ノ大王ドコロカ、天国ノ使者デスヨ。

アナタハ天使ヲコロソウトスル、大悪魔デス」

荒野は烈しく咳き込んだ。

「まあいい、いくら聞いても、屁理屈にすぎん。

大悪魔けっこう、ボクは君を倒す、そのためだけに復活したのだからねえ。

ケケケ」

「麻暮サンハ、人類ノ敵、世界ノ敵、地球ノ敵、宇宙ノ敵デスネ。

イヤ、ソレ以前ニ、偉大ナル思想ノ敵デスヨ。

アナタガ、コノ世ニイナケレバ、偉大ナル思想ハ、人類ヲ世界ヲ地球ヲ宇宙ヲ、カエルコトガ、デキタノデスカラ」

荒野が黒い天に向かって放った言葉は、呪詛に似ていた。

「もうそろそろいいだろう、云いたい事は云っただろう。

ボクは君の御託を聞くために、待っていたのではないよ。

ケケケ」

「ワカッテイマスヨ、私ヲ、ツマリ宇宙ノ未来ヲ、無残ニ抹殺スルタメニデショウ。

プフイ」

荒野の声音は、諦念した者のそれだった。

「君だけを抹殺しようなんて、姑息な事は考えてはいないよ。

ご存じだろうが、ボクは君を倒すためだけに生きているんだからね。

君だって、ボクが生きているだろうと信じていたからこそ、これだけの事をやって、ボクを挑発したんだろうよ。

荒野大三郎が死滅すれば、麻暮正作も死滅しなければならない。

解るかね、解るだろうよ。

ケケケ」

「マッタク私モ、トンデモナイ大悪魔ニ、ミソメラレタモノデスネ。

プフイ」

「遺言を聞こうか」

「遺言デスカ、誰ニノコスノデスカ」

「君が思うようにならなかった、人類に遺すんだよ。

ケケケ」

「私ハマダ、死滅スルツモリハアリマセンカラ、ノコスモノハ必要アリマセン。

麻暮サンこそ、ノコシタライカガ。

プフイ」

「ボクは君とちがって、偉人でも何でもないので、遺すものは骨の一片すらない。

君は三十秒後に死滅するんだよ、ボクと共にね。

ケケケ」

「オオオ。

何トイウ愚劣、何トイウ醜態、何トイウ悲劇」

荒野が黒い天に向かって放った呪詛が終わらぬうちに、宙を飛んだ麻暮は荒野に抱きついた。

格闘は、まったくなかった。

麻暮の力が荒野の力よりも、数段勝っていたのだ。

まるで心中する恋人さながら、二人は絡み合ったまま、三十メートル下の海面に向けて、真っ逆さまに落ちて行った。

三十メートルの空間で、黄金仮面のなかの脳味噌が回転している。

《死は／おそらく／快樂／ではないだろうが／死／の寸前は／快樂なのかもしれない／六十年前／もこうして／麻暮正作／と抱き合っ／江ノ島の海に／突入して行った／あれがつい／昨日のことに／思えるのは／一体／なぜだろう／この海／この闇／私の思想／いや死想は／私の死／と共に／消える／のであろうか／それとも／死が／私の死想を／抹殺するのであろうか／人類は／謎だ／宇宙は／謎だ／そして私は／謎だ／私はどうして／私に成り得たのか／私は／何処から／来て／何処へ／行く／存在／なのだろうか》

三十メートルの空間で、鉄仮面のなかの脳味噌が回転している。

《探偵なんかに夢中になれました／なんというしあわせでしたらう／復讐なんかに夢中になれました／なんというしあわせでしたらう／妹が殺されて脱糞しました／なんというしあわせでしたらう／妹の自殺は一入糧になりました／なんというしあわせでしたらう／巨大な敵に恵まれました／なんというしあわせでしたらう／ここぞというとき復活しました／なんというしあわせでしたらう／同志がお先に失礼と死にました／なんというしあわせでしたらう／同志が車椅子です／なんというしあわせでしたらう／何度も棺桶に片足つつこみました／なんというしあわせでしたらう／益々醜くなってゆきました／なんというしあわせでしたらう／人生つまらんなあと呟いてばかりいました／なんというしあわせでしたらう》

五月二十七日、午前六時。

だれもまだ気づいてはいないのだが、江ノ島の閑散とした浜辺に、真ん中にヒビのはいった鉄の仮面と、片頬が欠けた黄金の仮面が打ち上げられている。

巨大な貝殻にも見えるそれらは、いずれも笑っていたが、その事もまだだれも気づいてはいない。